

次の文章を読み、後の設問に答えよ。なお、設問の都合で本文の段落の一部に〔1〕～〔8〕の番号を付してある。

お金を使いまくつたり、ものを捨てまくつたりするのはとてもいいことだとは思えない。必要を超えた余分が生活に必要なことは分かるし、それが豊かさの条件だということも分かる。だが、だからといって贅沢を肯定するのはどうなのか？

このような疑問は当然だ。

この疑問に答えるために、ボーデリヤールという社会学者・哲学者が述べている、浪費と消費の区別に注目したいと思う。贅沢が非難されるときには、どうもこの二つがきちんと区別されていないのだ。

浪費とは何か？浪費とは、必要を超えて物を受け取ること、吸収することである。必要のないもの、使い切れないものが浪費の前提である。

浪費は必要を超えた支出であるから、贅沢の条件である。そして贅沢は豊かな生活に欠かせない。

浪費は満足をもたらす。理由は簡単だ。物を受け取ること、吸収することには限界があるからである。身体的な限界を超えて食物を食べることはできないし、一度にたくさん服を着ることもできない。つまり、浪費はどこかで限界に達する。そしてストップする。

人類はこれまで絶えず浪費してきた。どんな社会も豊かさをもとめだし、贅沢が許されたときにはそれをキョウ受した。^aあらゆる時代において、人は買い、所有し、楽しみ、使った。「未開人」の祭り、封建領主の浪費、一九世紀ブルジョワの贅沢……他にもさまざまな例があげられるだろう。

しかし、人類はつい最近になつて、まったく新しいことを始めた。
それが消費である。

浪費はどこかでストップするのだった。物の受け取りには限界があるから。しかし消費はそうではない。消費は止まらない。消費には限界がない。消費はけつして満足をもたらさない。

なぜか？

消費の対象が物ではないからである。

人は消費するとき、物を受け取つたり、物を吸収したりするのではない。人は物に付与された観念や意味を消費するの

である。ボードリヤールは、消費とは「観念論的な行為」であると言っている。消費されるためには、物は記号にならなければならない。記号にならなければ、物は消費されることができない。

記号や観念の受け取りには限界がない。だから、記号や観念を対象とした消費という行動は、けつして終わらない。たとえばどんなにおいしい食事でも食べられる量は限られている。腹 ① 分目という昔からの戒めを破つて食べまくったとしても、食事はどこかで終まる。いつもいつも腹 ① 分目で質素な食事というのはさびしい。やはりたまにはゴウ勢な食事を腹一杯、十二分に食べたいものだ。これが浪費である。浪費は生活に豊かさをもたらす。そして、浪費はどこかでストップする。

それに対し消費はストップしない。たとえばグルメブームなるものがあつた。雑誌やテレビで、この店がおいしい、有名人が利用しているなどと宣伝される。人々はその店に殺到する。なぜ殺到するのかというと、だれかに「あの店に行つたよ」と言うためである。

当然、宣伝はそれでは終わらない。次はまた別の店が紹介される。またその店にも行かなければならない。「あの店に行つたよ」と口にしてしまった者は、「えええ？ この店行つたことないの？ 知らないの？」と言われるのを嫌がるだろう。だから、紹介される店を延々と追い続けなければならない。

これが消費である。消費者が受け取っているのは、食事という物ではない。その店に付与された観念や意味である。

② だから消費は終わらない。

浪費と消費の違いは明確である。消費するとき、人は実際に目の前に出てきた物を受け取っているのではない。これは前章で指摘したモデルチエンジの場合と同じである。なぜモデルチエンジすれば物が売れて、モデルチエンジしないと物が売れないのかと言えば、人がモデルそのものを見ていないからである。「チエンジした」という観念だけを消費しているからである。

ボードリヤール自身は消費される観念の例として、「個性」に注目している。今日、広告は消費者の「個性」を煽り、消費者が消費によって「個性的」になることをもとめる。消費者は「個性的」でなければならないという強迫観念を抱く。問題はそこで追求される「個性」がいつたい何なのがだれにも分からぬということである。したがつて、「個性」はけつして完成しない。つまり、消費によって「個性」を追いもとめるとき、人が満足に到達することがない。その意味で消費は常に「失敗」するように仕向けられている。失敗するというより、成功しない。あるいは、到達点がないにもかかわらず

ず、どこかに到達することがもとめられる。こうして選択の自由が消費者に強制される。

消費社会を相対的に位置づけるために、それとは正反対の社会を紹介しよう。ボードリヤールも言及しているが、人類学者マーシャル・サーリンズは「原初のあふれる社会」という仮説を提示している。これは現代の狩猟採集民の研究を通じて、石器時代の経済の「豊かさ」を論証したものである。

狩猟採集民はほとんど物をもたない。道具は貸し借りする。計画的に食料を貯蔵したり生産したりもしない。なくなりたら採りに行く。無計画な生活である。

彼らはしばしば、物をもたないから困窮していると言われる。そして、それは彼らの「未来に対する洞察力のなさ」こそが原因であると思われている。つまり、計画的に貯蔵したり生産したりする知恵がないために十分に物をもつていないとして、「文明人」たちから憐れみの目で眺められている。

しかし、これは実情から著しくかけ離れている。彼らはすこしも困窮していない。狩猟採集民は何ももたないから貧乏なのではなくて、むしろそれ故に自由である。「きわめて限られた物的所有物のおかげで、彼らは日々の必需品に関する心配からまつたく免れており、生活をキヨウ受しているのである」。

また、彼らが未来に対する洞察力を欠き、貯蓄等の計画を知らないのは、知恵がないからではない。彼らのような生活では、単に未来を思い煩う必要がないのだ。

[1] 狩猟採集生活においては少ない労力で多くの物が手に入る。彼らは何らの経済的計画もせず、貯蔵もせず、すべてを一度に使い切る大変な浪費家である。だが、それは浪費することが許される経済的条件のなかに生きているからだ。

[2] したがつて狩猟採集民の社会は、一般に考えられているのとは反対に、物があふれる豊かな社会である。彼らが食料調達のために働くのは、だいたい一日三時間から四時間だという。サーリンズは、農耕民に囲まれていたけれども農業の採用を拒否してきた、ある狩猟採集民のことを紹介している。なぜ彼らは農業の採用を拒んできたのか？「そうなればもつとひどく働かねばならない」からだそうである。

[3] もちろん狩猟採集民を過度に理想化してはならない。狩猟採集民もうまく食料調達ができることはあろうし、環境の変化によって容易に困窮に陥ることはあろう（しかし、農耕民の方がその可能性が高いとも言えるのだが……）。

重要なのは、彼らの生活の豊かさが浪費と結びついているということである。彼らは贅沢な暮らしを営んでいる。これが重要である。ボードリヤールやサーリンズも言うように、浪費できる社会こそが「豊かな社会」である。将来への気づ

かいの (3) と浪費性は「眞の豊かさのしるし」、贅沢のしるしに他ならない。

[5]

消費社会はしばしば物があふれる社会であると言われる。物が過剰である、と。しかしこれはまつたくのまちがいである。サーリングス^cをエン用しつつボーデリヤールも言つてゐるよう、現代の消費社会を特徴づけるのは物の過剰ではなくて稀少性である。消費社会では、物がありすぎるのではなくて、物がなさすぎるのである。

[6]

なぜかと言えば、商品が消費者の必要によつてではなく、生産者の事情で供給されるからである。生産者が売りたいと思う物しか、市場に出回らないのである。消費社会とは物があふれる社会ではなく、物が足りない社会だ。

[7]

そして消費社会は、そのわずかな物を記号に仕立て上げ、消費者が消費し続けるように仕向ける。消費社会は私たちを浪費ではなくて消費へと力り立てる。消費社会としては浪費されては困るのだ。なぜなら浪費は満足をもたらしてしまうからだ。消費社会は、私たちが浪費家ではなくて消費者になつて、絶えざる観念の消費のゲームを続けることをもとめるのである。消費社会とは、人々が浪費するのを妨げる社会である。

[8]

消費社会において、私たちはある意味で我慢させられている。浪費して満足したくとも、そのような回路を閉じられてゐる。しかも消費と浪費の区別などなかなか思いつかない。浪費するつもりが、いつのまにか消費のサイクルのなかに閉じ込められてしまう。

この観点は極めて重要である。なぜならそれは、質素さの提唱とは違う仕方での消費社会批判を可能にするからである。³

しばしば、消費社会に対する批判は、つつましい質素な生活の推奨を伴う。「消費社会は物を浪費する」「人々は消費社会がもたらす贅沢に慣れてしまつてゐる」「人々はガマンして質素に暮らさねばならない」。日本でもかつて「清貧の思想」というのが流行つたがまさしくこれだ。

そうした「思想」は根本的な勘違いにもとづいてゐる。消費は贅沢などもたらさない。消費する際に人は物を受け取らないのだから、消費はむしろ贅沢を遠ざけてゐる。消費を徹底して推し進めようとする消費社会は、私たちから浪費と贅沢を奪つてゐる。

しかも単にそれらを奪つてゐるだけではない。いくら消費を続けても満足はもたらされないが、消費には限界がないから、それは延々と繰り返される。延々と繰り返されるのに、満足がもたらされないから、消費は次第に過激に、過剰になつていく。しかも過剰になればなるほど、満足の欠如が強く感じられるようになる。

これこそが、二〇世紀に登場した消費社会を特徴づける状態に他ならない。

消費社会を批判するためのスローガンを考えるとすれば、それは「贅沢をさせろ」になるだろう。

消費を記号や観念の消費として考えていくと、実は、現代のさまざまな領域が消費の論理で動いていることが分かる。

人間のあらゆる活動が消費の論理でオホイ尽くされつつある。

なかでもボーデリヤールが注目するのは労働である。現在では労働までもが消費の対象になつていて、どういうことがと言ふと、労働はいまや、忙しさという価値を消費する行為になつていて、一日に一五時間も働くことが自分の義務だと考えている社長や重役たちのわざとらしい「忙しさ」がいい例である。

これは労働そのものが何らの価値も生産しなくなつたという意味ではない。当然ながら社会のなかにある労働は価値を生産しているし、それがなければ社会はまわらない。「労働の消費」という事態が意味しているのはそうではなくて、消費の論理が労働をも才才い尽くしてしまつたということである。

こうやつて見ると、ガルブレイスが能天気に推奨していた「新しい階級」の問題点がさらにいつそうよく分かる。ガルブレイスは仕事に生き甲斐を見出す階級の誕生を歓迎した。しかし、それは消費の論理を労働にもち込んでいるにすぎない。

ここからさらに興味深い事態が現れる。労働が消費されるようになると、今度は労働外の時間、つまり余暇も消費の対象となる。自分が余暇においてまつとうな意味や観念を消費していることを示さなければならないのである。「自分は生産的労働に拘束されてなんかないぞ」「余暇を自由にできるのだぞ」。そういう証拠を提示することをだれもが催促されている。

だから余暇はもはや活動が停止する時間ではない。それは非生産的活動を消費する時間である。余暇はいまや、「俺は好きなことをしているんだぞ」と全力で周囲にアピールしなければならない時間である。逆説的だが、何かをしなければならないのが余暇という時間なのだ。

(國分功一郎『暇と退屈の倫理学 増補新版』による。ただし一部変更した。)

問一 傍線 a～e のカタカナを漢字に直した場合と同一の漢字を用いるべき文はどれか。その符号を a～工の順ですべて答えよ。（例：ア・イ）

国

- a キヨウ受 |
國木田独歩、正岡子規も早世であつたが、彼女もキヨウネン三十七である。
- b ゴウ勢 |
おおらかな彼と比べると、私はなんとキヨウリョウでわがままなことだらう。
浴衣を着て近所の祭りに出かけ、真一と共に金魚すくいにキヨウじた。
- c エン用 |
父の意に反し、放蕩息子の真二郎は五年もの間、美のキヨウラクにふけつた。
- d カリ立てる |
ア 伸一はお腹が空いていたのか牛一頭でも食べ尽くすかのようにゴウカイに食べた。
イ 良子は頑固でどんなに怒られてもゴウジョウを張り謝らないのだ。
ウ あまりにもトラブルが続出し予定どおり建設が進まないことに社長はゴウを煮やした。
エ 「私の話を聞かせてやる」などと言つた彼女のおごり高ぶつた態度は本当にゴウマンそのものだ。
- e オオい尽くす |
ア 熊が住宅地に相次いで出没しているため、熊の移動経路になりやすい草やぶをカリ取つた。
イ 整社は社員の住居確保のためにマンション一棟を一括でカリ上げている。
ウ このまま外来種の増加を放置すれば、日本の固有種がクチクされてしまう恐れがある。
エ この非営利団体は経済的に困窮している人のかけ込み寺となつてゐる。

問二 空欄①には漢字一字が入る。適切な漢字を答えよ。

問三 空欄②に入る最も適切なものを次のの中から一つ選び、符号で答えよ。

ア この消費行動において、店の意味が消失してしまつていてる。

イ この消費行動において、消費の意味が消失してしまつていてる。

ウ この消費行動において、店は消費の対象になつていない。

エ この消費行動において、消費自体が観念化されている。

オ この消費行動において、店は完全に記号になつていてる。

問四 傍線1「こうして選択の自由が消費者に強制される。」とあるが、その説明として最も適切なものを次のの中から一つ選び、符号で答えよ。

ア どのような物を受け取れば満足に至るのか選択を迫られるということ。

イ 自分自身で個性を選び取ることによって終わりのない選択ゲームに参加を強いられるということ。

ウ 自由になるために自分はどういう個性を選択すべきか迫られるということ。

エ 何を選ぼうが自由であるはずなのに結局他と大差の無いものを選ぶよう迫られるということ。

オ いずれを選択してもゴールのない個性獲得ゲームに参加を強いられるということ。

問五 傍線2「文明人」とあるが、著者は「文明人」をどのような存在だとしているか。その説明として最も適切なものを次のの中から一つ選び、

符号で答えよ。

ア 狩猟採集民と比べて、より多くのものを浪費する存在

イ 狩猟採集民と比べて、より良い知恵を持つか疑わしい存在

ウ 狩猟採集民と比べて、未来に対する洞察力を持つ存在

エ 狩猟採集民と比べて、計画的に行動する能力を持つ存在

オ 狩猟採集民と比べて、あふれる豊かな社会を知る存在

問六 空欄③に入る最も適切なものを次のなかから一つ選び、符号で答えよ。

ア 無謬

イ 欠如

ウ 拒否

エ 価値

オ 採用

カ 変化

キ 無為

ク 超越

問七 傍線3「質素さの提唱とは違う仕方での消費社会批判」とあるが、どうすることが消費社会批判につながると著者は主張しているか。その説明として最も適切なものを次のなかから一つ選び、符号で答えよ。

ア 觀念の消費を抑制し、物の稀少性に支配されないことが、消費社会批判につながる。

イ 我慢を推し進めて満足を得ることが、消費社会批判につながる。

ウ 過激な消費ゲームをやめ、満足をもたらす消費をすることが、消費社会批判につながる。

エ 浪費を理解し贊沢を志向することが、消費社会批判につながる。

オ 記号の絶えざる消費サイクルから抜け出すことが、消費社会批判につながる。

問八 空欄④に入る最も適切なものを次のなかから一つ選び、符号で答えよ。

ア 彼らが労働するのは、労働に「生き甲斐」を見出すことが強制されているからなのだ。

イ 彼らが労働するのは、労働自体を觀念化するためなのだ。

ウ 彼らが労働するのは、労働という觀念に「生き甲斐」を見出すためなのだ。

エ 彼らが労働するのは、労働により忙しさという価値を生み出すためなのだ。

オ 彼らが労働るのは、「生き甲斐」という觀念を消費するためなのだ。

問九

1 から 8 のいずれかの直前で節が分かれているが、どこか。節が変わった最初の番号を一つ答えよ。

問十

次の文のうち、本文の内容と合致するものを三つ選び、符号（ア～キの順）で答えよ。

ア 消費社会では次々に新しい意味が供給され、人々はそれを消費し続けている。

イ 余暇は何もしない時間ではなく、「自由」をキョウ受していることをアピールする時間となっている。
ウ 記号を消費することは毎日を忙しくするが、それを継続することで充実感は得られる。

エ 生活を質素にすることは消費社会の対極として位置づけることはできないが、満足へ至る一つの方法と言える。

オ 労働はすでに消費の対象となっているため、そこに意味を見出すこと自体矛盾している。

カ 消費社会の中で人々は終わらない記号の消費のゲームを続け、せわしなく意味を追いかけている。
キ 消費社会は物であふれ、人々は浪費に明け暮れているため、いつまでも満足はもたらされない。

次の文章を読み、後の設問に答えよ。

だれかのことを思うときに、そのひとの顔を思い浮かべることなしにそのひとを思うことはできない。

わたしたちはいつもだれかのことを思つてゐる。が、そのひとは人格という何か抽象的な存在ではない。具体的な顔をもつたひとである。あるいはむしろ、具体的な顔としてあるひとである、と言つたほうがいいかもしない。ひとは顔としてある、と。けれども、顔とは人体の上部に位置するあの顔面のことだろうか。その具体的な造作のことだろうか。

顔は「だれか」の具体的に見える存在だとだれもが考える。だれかに見つめられるというのは、だれかの眼がこちらを見つめているということである。だれかが怒つているというのは、だれかがそのような表情をしてゐるということである。けれどもそのことをわたしたちはそのひとの眼を見ることで、あるいはそのひとの顔面に浮かぶ表情の変化によつて、それとして知るのだろうか。そう考えるには、顔はあまりにも異様な現われ方をする……。

顔は見える、顔はだれかに見られると、あたりまえのようにひとは言う。けれども、だれかの顔を見るという経験を思い起こせばすぐわかるように、だれかの顔を見つめるということ、まじまじと見るということは、じつさいにだれかの顔を前にしたときにはほぼ不可能である。相手が自分を見つめているとき、相手を見つめ返すのはむづかしいことだ。たがいにその存在を渴望しあう瞬間か、相手を怨んで睨みつけるときには、相手の顔をしばし凝視することがたしかにある。けれども、相手の顔を見つめつづけることはやはり苦痛である。いずれ眼を逸らしてしまうものである。

顔を見つめあうとき、まなざしはすぐに金縛りにあつたように、凍りつき、凝固してしまう。眼がかち合うと、まなざしはたがいに密着してしまい、相手のまなざしを見るということ、つまり距離を置いて対象として見ることは不可能になる。見ることそのことが膠着するか、そのような膠着のなかで視線を無理やり引き剥がすか……。いずれにしても平静に相手の眼を見つづけることはできない。これを裏返して言えば、他人の顔というものは盗み見しかできないということである。だれかの顔は、相手がこちらを見ていないとき、別のものに視線をやつてゐるときに、いわば盗み見するというふたちでしか、じつと見つめることができない。どこのつまり、だれかの顔は、それを見るわたしを見返されないかぎりにおいてしか見ることができない。にもかかわらずそれは、だれかの顔として、ときにそれをまなざす視線をうろたえさせるほどたしかな強度をもつて切迫してくる存在である。

そのようにしか現われえないはずの顔が、街には溢れている。ポスターの顔、雑誌の表紙を飾る顔、テレビのなかから

語りかけるキャスターの顔……。だが、これらはほんとうにだれかの顔なのだろうか。これらの顔はこちらをじつとまなざしているにもかかわらず、じつはわたしを見つめていない。そこでは視線がたがいにふれるということがない。わたしは相手に見つめられることなしに、相手の顔を見つめている。わたしは見るひと、相手は見られるひと、そういう二つの顔が向きあつてはいても、そこにはおよそ関係³というものが発生しない。そう、そのような画像としての顔は、言つてみればマジックミラー越しに見る顔である。とすれば、それは顔を見ているのではないのだ。物や風景を見つめるのと同じように、だれかの顔面を見つめているだけのことである。このように、関係が起こらないところでのみひとは顔を見ることができる。逆に、顔の接触がなんらかの関係をかなならずや引き起こさざるをえないところでひとは顔を見ることができない。前者において「見る」とは観察することである。後者において「見る」とはふれることである。見るために必要な距離がそこでは開かれないとある。

にもかかわらず、他者の顔はわたしに切迫してくる。貼りつくように、おもねるように、懇願するように、迫つてくるのに、それを注視しようとするとすぐに消え入ってしまう顔。ときとして、頑として退く気配のない塊としてぬつと現われてきて、それを追い払おうとして見返すと、視線が接触した瞬間、わたしのまなざしを有無を言わせず弾きかえす顔。他者の顔はこのように、こちらに眼を向けよど、わたしのまなざしを、いや、わたしの顔を召喚しにくる。眼を伏せても執拗に追いかけてくる。□

が、顔はまた憐いものである。見つめるとすぐに消え入るような脆いもの、傷つきやすいものである。顔は切迫していくが、それを見つめる視線を前にしてすぐに身を退ける。これをエマニュエル・レビイナスは顔の「撤退」、顔の「羞じらい」と呼ぶ。それは対象となることを拒む。それほどまでに顔は壊れやすい。じつと見つめられたときの居心地の悪さを思い出せばよい。視線が、見返す眼が、顔を壊し、歪める。かぎりなく近くにありながら、まさにそのときにもつとも遠ざかり、もつとも隔てられているといふこのもどかしさを経験したことのないひとなど、たぶんいないだろう。とすれば、レビイナスの言う「羞じらい」としての〈顔〉とは、消え入ることそのことで現われるものだということになるのだろうか。あるいは、消え入ることそのことになるのだろうか。

だが、こうした薄弱な現象、はすかいの現象に、ひとは抗いようもなく引きずり込まれ、釘付けになる。そして、相手の顔をざぐりにゆく。そこに何かを読もうとうかがう。「読む」というのは、顔を何かのしるしとしてとらえるということだ。背後でうごめくものの表徴として、である。〈顔〉はこのように「読む」ことへの欲望を搔きたててやまない。その読ま

れるべき顔を、ひとは「表情」と呼んでいる。悦びの顔、恨みの顔、苦しみの顔、怒りの顔、放心の顔、鬱屈の顔、猜疑の顔……。顔は、透かし模様のように「表情」の現われ出ているものとして読まれる。顔は現われそのものとしてではなく、何かの徵候や反映や表出として、たえず読まるのだ。読まるるというかたちで、現われるやすぐに現われとは異なる次元に拉致される。意味の出現する表面として。□ 3

顔を読むことへの欲望が果てしないのには、わけがある。他人の顔はこれまでずっとわたしの鏡でもあつたからだ。乳児を前にした母親の表情を思い出せばよい。母親は、「口を大きく動かし、頭をうなづくように振り、目を見ひらき、おげさな身振りで赤ちゃんに語りかける（空間的な誇チヨウ）」、「ことばやしぐさが、スローモーションをかけたように、ゆつくりになる（時間的な誇チヨウ）」、「笑い、驚き、眉をしかめる（情緒的な誇チヨウ）」（下條信輔『まなざしの誕生』）。このことで、乳児は母親に乳児の（まだない）「自己」^dを送り返される。自分がいまどのような状態にいるのか、自分がどのような感情に浸されているのか……。それを、乳児は母親によつて示される。乳児の何やらわけのわからぬ情動に最初のかたちがあてがわれるのである。乳児の「人格」は母親の顔という鏡にまずは映し出される。乳児のふるまいにいくつかの□ A が敷かれる。以後、子どもは迷つたときに他者の顔をうかがうようになる。相手を知りたいというよりは、自分が生きのびるその□ A を知るために、ひとは赤子の頃より他者の顔を慎重にうかがつてきたのである。

ひとがそれほどまでにやつきに顔を読もうとするのは、顔がたんなるアピアランス（外見）、つまりは何かの外への現われなのではなく、顔という現われが顔の存在そのものであるからに違いない。そうだとすると、表情としての顔が瞬間ごとにめくれ、ときに別のそれへと反転したりするのも、「作り顔」のあいだから間歇的に^{かんけつてき}「素顔」がのぞくというふうには解釈しないほうがよい。□ 4

「うわべを繕う」とひとは言う。顔はうわべのかたちであり、ほんとうに存在すると言えるのは、その背後にある「内面」だというわけだろう。顔が「うわべ」であり、「見かけ」にすぎないと考えられるとき、それは「表面」になる。言つてみれば、「外面」、そう、「そとづら」である。つまり顔には、ほんとうの顔と偽りの顔という区別が差し込まれている。顔には、その背後にあるものをそのまま歪めることなく映している「素顔」としての顔と、その背後にあるものを隠蔽している「仮面」としての顔とがあるというわけだ。「素顔」を出すひとにはその表出に曇りはなく、だから他人から「素直」だと言われ、あるいはそれを裏返して「すきだらけ」（無防備）とも言われる。「素顔」をすぐには露わにしないひとには背後を見えにくくするいくつもの遮蔽幕があつて、だから「ひねくれている」「屈折している」と、あるいは「よこしまな」

ひと、「一筋縄ではいかない」ひとというふうに、他人には映る。

が、顔はほんとうにだれかの「表面」なのだろうか。「表」には「裏」がある。「面」には「奥」がある。同じように、顔には「裏」があり、「奥」があるのだろうか。「おもてを上げい」という殿様の台詞ではないが、顔は「おもて」とも言う。「おもて」は、「表」と書くが、「面」とも書く。能面の「おもて」がそうである。両方を合わせたのが「表面」という言葉。⁴が、「表面」ほど顔にそぐわない言葉はないのではないか。顔の背後に何かを想定すれば、顔はなるほど「表面」になる。それが表わしているひとの「こころ」とか、「人格」とか、「内面」とかを想定すれば、顔はその表出、つまりは外への現象形態だということになる。「作り顔」というのも、そのような内部が顔の背後に存在すると考えると納得できる。顔はたしかに「作れる」。それでその内なる何かを「繕う」ことができる。

顔がもしたなんなる「現象」であるとすれば、わたしたちは顔よりも顔の背後にあるものに関心をもつてているということになる。ひとの顔をうかがうということには、たしかにその表情をつうじてそのひとの真意を推し量るという面がある。うかがううちに、そのひとが何を思っているかが仄かに見えてきて、というより、見えたと思えてきて、相手の顔がそれまでとは違うように見えだしもある。が、これは顔の背後が見えたということではない。別の、これまで見えなかつた顔が見えたということだ。つまり、顔をめぐればもう一つの顔が見えたということにほかならない。その意味では、ひとの存在はどこまでも顔として現われる、めくつてもめくつても顔として現われる……。そのように言うほかない。

本物か偽物かという区別は、その背後に想定された「存在そのもの」をそのまま表出しているか、それともそれを歪めたり覆つたりしているかという区別でしかない。が、顔はさまざまな現われ（何かの現われ）のなかの一つの特殊な現われなのではない。顔はむしろ、背後というものを前提しない、背後より先なる、言いかえると何かの現われという記号作用よりもさらに先なる、現われそのものであると言ったほうがよい。先にも見たように、日本語の「おもて」という言葉が「顔」と「仮面」の区別に先立つような顔についての経験を言い当てると思われる。⁵

とすれば、顔とはつまり、何かとして現前しえないというかたちで現前してくる、あるいは、消え入るというかたちでしか現われない、そういう B な現象であるということになる。そうして「表情」とは、意味に拉致された顔でしか現われないということになる。

（鶴田清一『わかりやすいはわかりにくい？——臨床哲学講座』による。ただし一部変更した。）

問一 傍線 a、c、e の読みをひらがなで書け。

問二 傍線 b、d のカタカナを漢字に直した場合と同一の漢字を用いるものをそれぞれ一つ選び、符号で答えよ。

- ア 地方自治体にイカんする
イ 日本の近現代史をガイカんする

b 召カン

ウ 注意をカンキする

エ 重症患者をカソゴする

オ 専門家としてカソシユウする

d 誇チヨウ
イ ジョウチヨウな文章表現
ウ タイチヨウ管理を徹底する
エ 駐車場のチヨウカ料金
オ 会費をチヨウシユウする

問三 本文には次の部分が抜けている。空欄 1～5 のうち、これを入れるのに最も適切な箇所を一つ選び、符号で答えよ。

顔と顔のあいだは、言つてみれば、こうした粘着と引き剥がしという相反する力が交差する場、いわば磁場のようなものなのである（…）ここでついでに言つておけば、よく知つてゐる顔だからと言つて、その顔の造作をくわしく知つてゐるわけではない。たとえば家族の顔。毎日見てゐるはずの顔であつても、眉毛はどうなつてゐるか、唇のかたちはどうかと訊かれたとき、わたしたちはその形狀を事細かに描写することができない。耳のかたち、眉のかたち、唇のかたちを意外に知らないのである。家族の顔はたえず切迫の交錯のなかで現われてくるものであり、対象としてじつとまなざすという類のものではないからである）。

問四

傍線 1 「だれかの顔を見つめるということ、まじまじと見ることは、じつさいにだれかの顔を前にしたときにはほぼ不可能である」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 相手の顔をしばらく凝視するのは、渴望や怨みの現われと解釈されかねない憚るべき行為であるから。

イ 見つめるという目的を、盗み見によつて果たそうとしていることを相手に察知されるのは難しいから。

ウ 相手と眼がかち合うことで、視線が凝固してしまうか眼を逸らすかのいずれかしか道がなくなるから。

エ 見つめられることでまなざしが凝固した相手の顔を見ても、ほんとうの顔を見ているとはいえないから。

オ 相手の顔における造作は一部分ずつしか凝視できないため、顔を見つめていることにはならないから。

問五 傍線 2 「にもかかわらずそれは、だれかの顔として、ときにそれをまなざす視線をうろたえさせるほどたしかな強度をもつて切迫してくる存在である。」とはどういうことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 盗み見しか「だれかの顔」を見つめるすべがないにもかかわらず、「だれかの顔」は盗み見の視線さえも弾きかえしてくるということ。

イ こちらが見つめると、そのまなざしから逃れようとするにもかかわらず、「だれかの顔」は眼を向けることを執拗に求めてくるということ。

ウ 「だれかの顔」を見つめるのはほぼ不可能なことであるにもかかわらず、強い渴望や怨みの念があれば「だれかの顔」を見つめるのは必ずしも不可能ではなくなるということ。

エ こちらに視線を向けていない時だけが「だれかの顔」を見つめる好機であるにもかかわらず、そのような状況においても見ること自体の膠着という結果に終わるのが常であるということ。

オ 盗み見が道徳上良くないことであるにもかかわらず、「だれかの顔」はこちらを見返されないかぎりにおいてしか見つめることができないということ。

問六 傍線3「関係」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 互いの視線がふれる関係

イ 互いに直接的な面識がある関係

ウ 互いに誰なのかを知っている関係

エ 互いの表情から何かを読み取れる関係

オ 互いが目に見える範囲に存在している関係

問七 空欄Aに入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 緩衝材 イ 軌道 ウ 伏線 エ 布石 オ 防波堤

問八 傍線4「表面」ほど顔にそぐわない言葉はないのではないか」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 「表面」という言葉は「裏面」や「内部」の存在を含意するものであるが、顔に関しては「うわべ」や「仮面」に該当するものであり、ほんとうの顔を表すことに寄与しないから。

イ 「表面」という言葉は「裏面」や「内部」の存在を含意するものであるが、顔に関しては顔面の具体的な造作を表すものでしかなく、「内面」の存在を示唆することができないから。

ウ 「表面」という言葉は「裏面」や「内部」の存在を含意するものであるが、顔に関しては、顔の「奥」に「何か」が存在しその表出が顔である、という捉え方をすべきではないから。

エ 「表面」という言葉は「裏面」や「内部」の存在を含意するものであるが、顔に関しては「奥」にあるものがほんとうの顔に該当するため、「表」を意味する表現自体が不要であるから。

オ 「表面」という言葉は「裏面」や「内部」の存在を含意するものであるが、顔に関しては、外から見えるのは「素顔」や「仮面」といった「表面」だけであるため、「裏面」にある背後の何かと区別する表現自体が不要であるから。

問九 空欄Bに入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 逆説的 イ 直観的 ウ 表面的 エ 不可逆的 オ 普遍的



問十

傍線 5 「意味に拉致された顔」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、符号で答えよ。

ア 背後にある「何か」を前提しない、現前してくる顔そのもの

イ 背後にある「何か」を前提しない「別の顔」として瞬間ごとにめぐられていく顔

ウ 背後にある「何か」という前提の有無を問わず、純粹に「素顔」として認識される顔

エ 背後にある「何か」を前提して引き剥がされた「仮面」を失った顔

オ 背後にある「何か」を前提し、それが読まることを余儀なくされた顔

問十一 次の本文中の表現のうち、著者の考える「顔」の本質を適切に言い表したものすべて選び、符号で答えよ。二つ以上選ぶ場合は、

ア～コの順で答えること。

ア 表情

イ 何かのしるし

ウ 現われそのもの

エ 外への現象形態

オ 意味に拉致された顔

カ 意味の出現する表面

キ 何かの徴候や反映や表出

ク 背後でうごめくものの表徴

ケ 背後にあるものを隠蔽している「仮面」

コ 背後にあるものをそのまま歪めることなく映している「素顔」